

資料 1 2

瀧構成員提出資料

### 1. 主語を国民に置いた検証を

- EBPMの主語は国民である。検証のしやすさ、解像度の高さから供給者視点が生まれがちだが、ゴールはあくまで国民にとっての検証プロセスであるべき
- 教育であれば子ども・保護者、介護であれば当事者・家族が対象。ウェルビーイングや長期的な経済インパクトが主眼であり、提供側の生産性は重要だが、手段である
- 国民視点をナラティブとして記載することは、政府広報としても意義がある

### 2. 担い手の深刻な不足を見越した政策を

- 教職・介護職は、コンピューターによる代替が最も難しい分野。人材の奪い合いが激化する中で、従事者を質的・量的に確保する難易度は日増しに高くなる
- 担い手の働きがいは、生産性とは別軸で評価されるべき対象。eNPSや残業時間なども計測対象として重要であるほか、生活者として適切な稼得環境があるかも要検証

### 3. フレームワークは柔軟に見直す

- ロジックモデルの初期段階では、不安の残る矢印が発生。それでも継続的な仮説検証でフェーズは変わり、打率が上がる。やりっ放しにしないことがこれからのあり方
- 教育では学校外の場合（塾、フリースクール等）が、介護では医療政策や生活習慣が因子として働きうる。行政の論理ではなく、社会横断での補完・代替効果を見直せるよう、仮説の見直しこそ積極評価の対象に

### 4. データ分析基盤を百年の計に

- 各省庁における検証体制、政府横断での統計運用、人材確保など、分析基盤に予算を割くことは必須。インサイトの発見を評価することが、EBPMの今日的意義
- 結果として、国民起点で見た負担の推計や、真に日本が面しているトレードオフを示すことは、政策の納得度にもつながる
- 計算・分析能力はこれからも飛躍的に向上。ひとりひとりが最適な行政サービスをデータに基づき享受する時代に備えて、いまから未来の社会を作る投資を